

## 八ヶ岳南麓の中世陥し穴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/3557">http://hdl.handle.net/2297/3557</a>

# 八ヶ岳南麓の中世陥し穴

桜井 秀雄

## 1. はじめに

私が長野県諏訪郡原村柏木に所在する南平遺跡において、中世後半頃に位置づけられる陥し穴の存在を認識したのは平成9年のことであった。その後、こうした中世陥し穴の調査事例は増え、また過去に調査された遺跡にも中世陥し穴に該当する事例のあることも判明してきた。そこで本稿では、中世陥し穴について管見における事例の集成作業を行い、改めて考察してみたいと思う。

## 2. 南平遺跡にみられる中世の陥し穴

### —「打ち込み型」の存在と AMS 法による年代決定—

南平遺跡は諏訪郡原村に所在し、国史跡の阿久遺跡の1 km ほど東方に位置する。阿久川と大早川にはさまれた八ヶ岳西南麓ではやや狭い尾根上にひろがっている。

本遺跡は県営圃場整備事業に先立ち、平成9年に発掘調査が行われ、遺跡のひろがる尾根のほぼ全域が調査対象となった。発見された遺構としては、縄文時代中期中葉の竪穴住居跡 27 軒、小竪穴（土坑）368 基が認められた（註1）。小竪穴は縄文時代早期末の1基と今回の検討対象となる中世後半頃の12基以外は縄文時代中期中葉のものと理解できる。27軒の竪穴住居跡は環状にめぐり、その内側には300基以上の小竪穴群を有しており、縄文中期集落研究のうえからも貴重な遺跡となっている。

さて368基の小竪穴のうち、26基が陥し穴であった。これらの陥し穴は調査開始時ではすべて縄文時代の所産であることに疑念をもたないでいたが、調査最終段階で1基を除いた25基については重機による断ち割り作業（カッティング）を行い、逆茂木痕と考えられる坑底ピットの断面観察および放射性炭素年代測定（AMS法）結果等により、12基は中世後半頃の所産であると判断するにいたった。

坑底ピットの断ち割り観察によれば、逆茂木を「埋め込んだ」と「打ち込んだ」ものの2種が存在することが認められたが、「打ち込んだ」タイプ（以下、「打ち込み型」と称する。）の断面は、逆茂木の先端を鋭く角錐状に、そして多くの場合は4つの面を作り出していることが観察でき、これは何らかの金属製工具をもってしなければ不可能ではないかと考えられた。そうであれば縄文時代の所産である可能性はきわめて低くなる。また硬いローム層に打ち込むためには現在の「かけや」に類する道具が不可欠であることも縄文時代の所産とは考えにくい事象のひとつである。

一方、こうした「打ち込み型」の陥し穴2基から出土した炭化逆茂木を放射性炭素年代測定（AMS法）にかけたところ、ともに15世紀～17世紀前半代に比定された。この数値には大変な驚きをもったが、さきあげた考古学的事象とも齟齬することはなく、これにより「打ち込み型」の陥し穴が中世後半頃に比定できると判断することとなったのである。

調査概報ではこの「打ち込み型」をB型と分類し、「打ち込み」以外には、

- ・長径4 m・短径1 m程度の、細長い平面プランをもつこと。
- ・深さも1.5 m程度と深く、横断面がV字状を呈していること。
- ・逆茂木痕は数本であるものが大半であること。

が特徴としてあげられることを指摘したが、とりわけ中世陥し穴における最大の特徴は、逆茂木の埋設

方法にあり、「打ち込む」ことにあると私は考えるにいたったのである。

さて、調査概報には12基の中世陥し穴のうち、6基のデータ・遺構図を掲載した。

#### 事例1 南平遺跡小竪穴 134(図1)

平面プランは326×142 cm、深さは178 cmをはかる。坑底はほぼ平らであり、坑底ピットは10基を数える。

#### 事例2 南平遺跡小竪穴 135(図1)

平面プランは334×110 cm、深さは130 cmをはかる。坑底はほぼ平らであり、坑底ピットは5基を数える。逆茂木の一部が炭化した状態でみつきり、放射性炭素年代測定(AMS法)にかけたところ補正年代440±40年BPとの測定結果を得ている。

#### 事例3 南平遺跡小竪穴 351(図1)

平面プランは325×92 cm、深さは最深部で200 cmをはかる。坑底は北側から南側へと傾斜し、段をなしている。坑底ピットは5基を数える。

#### 事例4 南平遺跡小竪穴 367(図1)

平面プランは364×95 cm、深さは120 cmをはかる。坑底はほぼ平らであり、坑底ピットは6基を数える。

#### 事例5 南平遺跡小竪穴 372(図1)

平面プランは315×90 cm、深さは125 cmをはかる。坑底はほぼ平らであり、坑底ピットは7基を数える。本跡からも炭化逆茂木がみつきり、放射性炭素年代測定(AMS法)にかけたところ補正年代380±50年BPとの測定結果を得ている。

#### 事例6 南平遺跡小竪穴 374(図1)

平面プランは350×138 cm、深さは220 cmをはかる。坑底は南側から北側へと傾斜しており、坑底ピットは5基を数える。

### 3. 關盧沢遺跡の中世陥し穴

#### —AMS法による年代決定—

長野県諏訪郡原村払沢に所在し、南平遺跡に近隣する。平成9年度に南平遺跡とほぼ同時並行で行われた第2次調査で小竪穴3基が検出された。いずれも陥し穴であり、南平遺跡B型と同様な特徴を備えたものである。これらの陥し穴では坑底ピットのなかで逆茂木の一部が炭化した状態でみつかったものがあり、そのうちの1点は放射性炭素年代測定(AMS法)にかけたところ16世紀という結果を得ており、中世陥し穴として判断できる事例のひとつとなった(註2)。

#### 事例7 關盧沢遺跡小竪穴1(図2)

平面プランは350×111 cm、最深部で153 cmをはかる。底面はほぼ平らで長方形となり、その規模は320×48 cmとなる。底面ピットは6基を数えた。断面断ち割り作業を実施し、先端を角錐状に極めて鋭く尖らせた逆茂木を「打ち込んだ」痕跡が確認できた。その打ち込みは角錐状に尖らせたところから丸太部分までが打ち込まれている様子が観察できる。

#### 事例8 關盧沢遺跡小竪穴2(図2)

平面プランは326×104 cm、最深部で138 cmをはかる。底面は傾斜しているがその傾きは自然傾斜と同様で、形状は長方形を呈し、その規模は288×32 cmとなる。坑底ピットは5基を数えた。小竪穴2と同様に逆茂木を「打ち込んだ」痕跡と理解でき、その先端はより鋭利に作りだされていることがみてとれると報告されている。

**事例9 關盧沢遺跡小堅穴3(図2)**

平面プランは310×87 cm、最深部で125 cmをはかる。底面は傾斜しているがその傾きは自然傾斜と同様で、形状は楕円形に近い長方形を呈し、その規模は227×41 cmとなる。坑底ピットは5基を数える。小堅穴1・2と同様に逆茂木を「打ち込んだ」痕跡と理解でき、その先端はより鋭利に作りだされていることが報告されている。坑底ピットのうち3基では重複関係が明確に認められ、少なくとも2回にわたり使用されたことが判明した。

**4. 丘の公園第5遺跡での中世陥し穴****—鉄製工具による掘削痕—**

山梨県北杜市(旧北巨摩郡高根町清里)に所在する。南平遺跡調査以前に中世の可能性が指摘されていた陥し穴が発見されていた遺跡である(註3)。昭和63年度に調査され、A型と分類された縄文時代の陥し穴3基とともに、南平遺跡の中世陥し穴と同様なタイプであるB型陥し穴5基が検出された。

これらB型5基の陥し穴にはいずれも両端部の底面付近に掘削工具痕が残存するものがあり、調査ではこの部分を石膏で型取りし、モデリング陽像を作成した。そしてその詳細な分析により調査担当者の保坂康夫氏は、これらの掘削痕は鉄製鋏によるものであることを指摘したのである。さらに保坂氏は刃先の復元も試みており、B型7号陥し穴・B型9号陥し穴・B型11号陥し穴では同一の工具を用いていることも導き出している。その時期については「古墳時代から平安時代のU字形鋏・鋤先よりも直刃であり新しい要素があると言える」ことから、「古代以降、特に中世あたりの所産の可能性を考えておきたい」と論じている。中世陥し穴の存在を掘削痕の分析という考古学的手法に基づいてはじめて指摘した学史的にも重要な遺跡である。

**事例10 丘の公園第5遺跡B型6号陥し穴(図3)**

平面プランは434×160 cm、深さ150 cmをはかる。坑底は細長く溝状で、南へ傾斜する。坑底ピットは8基を数える。

**事例11 丘の公園第5遺跡B型7号陥し穴(図3)**

平面プランは424×134 cm、深さ120 cmをはかる。坑底は溝状で、南に傾斜する。坑底ピット7基を数える。

**事例12 丘の公園第5遺跡B型9号陥し穴(図3)**

平面プランは398m×126 cm、深さ120 cmをはかる。坑底は南に傾斜する。坑底ピットは6基を数え、直列する。

**事例13 丘の公園第5遺跡B型11号陥し穴(図3)**

平面プランは332×124 cm、深さ130 cmをはかる。坑底は南に傾斜する。坑底ピットは6基を数え、直列する。

**事例14 丘の公園第5遺跡B型13号陥し穴(図3)**

平面プランは434×104 cm、深さ110 cmをはかる。坑底はほぼ平らである。坑底ピットは6基を数え、直列する。

**5. 坑底ピットの断ち割り観察による中世陥し穴の抽出**

以上のように、南平遺跡・關盧沢遺跡では炭化した逆茂木の一部が残存していたことから放射性炭素年代測定(AMS法)が可能であった。また丘の公園第5遺跡では壁面の掘り方に残った掘削痕の詳細な分析により年代決定を行うことができた。

しかしながらこのように年代決定を可能とする判断材料をもつ事例は僅少であり、多くの場合、陥し穴の年代決定は容易ではない。こうした現状のなか、年代決定の有力な手がかりとなりうると考えられるのが、坑底ピットの断ち割り観察である。この有効性は南平遺跡での調査を通じて痛感した。その後、同様な断ち割りを実施する調査遺跡も続き、中世陥し穴と判断できる事例が認められるようになってきた。

#### (1)芝原尾根遺跡—四面加工の逆茂木先端部が出土—

長野県諏訪郡原村弘沢に所在する。平成7・8年度に調査が行われ、小竪穴415基他が検出された(註4)。このうち陥し穴は34基であり、報告書で9種に分類されている。本遺跡は南平遺跡の前年度に調査されたものであるため、すべて縄文時代の所産として報告されているが、坑底が溝状でピットが5つ以上であるA~D類はひとつのタイプであるにとらえられる。断ち割りを実施したのはB類の小竪穴389のみだが、これは「打ち込み型」である。また報告者はこれらのタイプはいずれも打ち込み型によるものだとの見解を示しており、A~D類は中世陥し穴と判断することができる。

#### 事例15 芝原尾根遺跡小竪穴8(図4)

平面プランは284×115 cm、深さは109 cmをはかる。坑底は溝状の長方形である。壁は途中で屈曲し、角度が急になる。

#### 事例16・17 芝原尾根遺跡小竪穴102・115(図4)

重複しており、115の方が新しい。平面プランは小竪穴102(事例16)が303×約85 cm、深さは130 cmをはかる。小竪穴115(事例17)が272×40 cm、深さは48 cmをはかる。いずれも検出面での平面形は溝状に細長く、坑底も同様である。壁は垂直に近い傾斜である。坑底ピットは小竪穴102が5基、小竪穴115が6基を数える。

#### 事例18 芝原尾根遺跡小竪穴103(図4)

平面プランは406×85 cm、深さは119 cmをはかる。検出面での平面形は溝状で斜面の方向に細長い。壁はほぼ垂直に近い。坑底ピットは7基を数える。

#### 事例19 芝原尾根遺跡小竪穴106(図4)

平面プランは325×123 cm、深さは136 cmをはかる。坑底は溝状に細長い。壁は垂直にたちあがる。坑底は斜面と同じ傾斜をもたず、中央で急斜面をつくって上下2段を作り出している。ピットは6基を数える。

#### 事例20 芝原尾根遺跡小竪穴111(図4)

平面プランは345×89 cm、深さは104 cmをはかる。坑底は溝状に細長い。坑底ピットは8基が認められたが、そのうち3基は再利用の打ち直しと考えられるため、5基を基本とする。

#### 事例21 芝原尾根遺跡小竪穴123(図4)

平面プランは353×116 cm、深さは143 cmをはかる。平面形は上面は溝状の中間がふくらんだ珪藻のような形で、坑底ピットは5基を数えるが、西側のものは打ち直しの可能性があり、4基を基本とすると思われる。

#### 事例22 芝原尾根遺跡小竪穴186(図4)

平面プランは376×152 cm、深さは160 cmをはかる。坑底は溝状に細長く、坑底ピットは5基を数える。坑底は両足を揃えて立てないほど狭い。

#### 事例23 芝原尾根遺跡小竪穴187(図5)

平面プランは324×84 cm、深さは80 cmをはかる。坑底は溝状の長方形、坑底ピットは6基を数える。

#### 事例24 芝原尾根遺跡小竪穴228(図5)

平面プランは 377×143 cm、深さは 157 cmをはかる。断面は漏斗状で、上部は外側に解放し、下部は垂直に近い。坑底は溝状の長方形である。坑底ピットは 5 基を数え、このうち西から 2 番目には先端部分の木質がわずかに残存していた。

#### 事例 25 芝原尾根遺跡小竪穴 346(図 5)

平面プランは 395×120 cm、深さは 154 cmをはかる。坑底は溝状で、両足をそろえて立てないくらい細い。壁の屈曲部はかなり下方にある。坑底ピットは 4 基を数える。

#### 事例 26 芝原尾根遺跡小竪穴 389(図 5)

平面プランは 350×110 cm、深さは 147 cmをはかる。坑底は溝状の長方形、壁は屈曲する。坑底ピットは 5 基を数える。本跡で特筆すべきは、坑底ピットのうち西から 2 番目・3 番目では逆茂木の先端部が残存していたことである。報告者は『これは「杭」の先端にはかならず、4 面が取られている。先端部は四面が取られているが、僅かに加工痕が認められ、石器により加工されたとすれば驚愕に値し、縄文時代の所産ということに疑念を抱く。』と述べているが、本跡が中世陥し穴であるならば、このような疑念は氷解するであろう。この残存する逆茂木は明確に四角い坑底小孔がみられないことから面取りは先端だけで、上部は丸太であったと観察されている。また本跡は断ち割りを実施しているが、掘り方は認められず、先端の形状から上から打ち込まれたものであると報告者は述べている。

#### 事例 27 芝原尾根遺跡小竪穴 425(図 5)

平面プランは 302×151 cm、深さは 125 cmをはかる。坑底は溝状である。ピットは 5 基である。

### (2)馬捨場遺跡

長野県茅野市泉野に所在する。平成 12・13 年度に調査され、旧石器時代の石器集中地点 21 箇所、縄文時代中期初頭の竪穴住居跡 6 軒、中期後半の竪穴住居跡 1 軒・土坑等の他、中世陥し穴 2 基が検出された。縄文時代土坑約 340 基のうち、陥し穴は 44 基を数えるが、断ち割りによる坑底ピット等の観察を通して、このうちの 2 基が中世陥し穴として報告されている(註 5)。

#### 事例 28 馬捨場遺跡 SK41(図 5)

平面プランは 384×144 cm、深さは 110 cmをはかる。平面形は上縁部が長楕円形、坑底が長方形を呈する。坑底幅は 20~25 cmをはかる。坑底ピットは 6 基を数える。これらのピットの覆土は単一層であり、先端が鋭利な円錐形を呈することから、逆茂木は打ち込まれたものと判断される。

#### 事例 29 馬捨場遺跡 SK201(図 5)

平面プランは 337×119 cm、深さは 106 cmをはかる。平面形は上縁部、坑底とも隅丸長方形を呈する。中位の四隅は明瞭に屈曲し、屈曲部に金属と思われる鋭利な工具による掘削痕が残る。坑底ピットは 7 基を数える。断面はすべてのピットで先端が鋭利な円錐形を呈し、逆茂木は打ち込み方法で付設している。

### (3)前尾根遺跡

長野県諏訪郡原村柏木に所在し、南平遺跡に近接する。平成 15 年度に行われた第 6 次調査で小竪穴 2 基が検出され、1 基が中世陥し穴として報告されている(註 6)。

#### 事例 30 前尾根遺跡小竪穴 101(図 6)

平面プランは 310×72 cm、深さは 88~117 cmをはかる。底面は傾斜しており、坑底ピットは 6 基を数える。断面断ち割り観察を行い、先端を角錐状に鋭く尖らせた丸太材を打ち込んだ痕であることが確認された。

## 6. 中世陥し穴の特徴

以上、中世に位置づけられる判断材料を備えた陥し穴について 30 事例をあげてきた。ここで、その特徴を抽出してみたい。

### A. 平面プラン

長楕円形を呈し、長軸方向に比べて短軸方向が極めて狭いことが最大の特徴である。規模でみると、長軸方向では 272cm（芝原尾根遺跡小竪穴 115）から 406cm（芝原尾根遺跡小竪穴 103）、また短軸方向では、40cm（芝原尾根遺跡小竪穴 115）から 160cm（丘の公園第 5 遺跡 B 型 6 号陥し穴）までの範囲にみられている。参考までに平均値では長軸約 360cm・短軸約 95cm 程度となるが、規模についてはもう少し幅をもっていると考えるべきであろう。

長短比についてみると、長軸が短軸の 2.3 倍（南平遺跡小竪穴 134）から 6.8 倍（芝原尾根遺跡小竪穴 115）までの範囲にみられる。中世陥し穴が細長い形状であることが改めて理解できよう。

ただし、壁土の崩落ということを考慮にいれなければならないため、これらの数値はあくまでも検出段階での形状・規模であることを忘れてはならないだろう。

### B. 壁の立ち上がり

短軸方向では、坑底から中途まで垂直に立ち上がり、上中位付近で屈曲し、外側に開くものが多く認められる。このタイプのうち、前尾根遺跡や關盧沢遺跡・丘の公園第 5 遺跡のように壁土の崩落によるものと考えられる事例も多く見受けられるが、芝原尾根遺跡では壁面に掘削痕が認められていることからこれが本来の姿であるとの報告もある。とすれば、ほぼ垂直にたちあがるものとの二者が存在していたと考えるのが妥当であろうか。

### C. 鉄製工具痕

丘の公園第 5 遺跡の他にも、南平遺跡、馬捨場遺跡、前尾根遺跡・關盧沢遺跡でも壁面に鉄製工具による掘削痕が認められている。馬捨場遺跡では SK41 で坑底の四隅が直角で鋭利な工具で掘削したと思われる痕跡が確認されており、SK201 でも壁面の屈曲部に金属と思われる鋭利な工具による掘削痕が残っていると報告されている。前尾根遺跡では鉄製工具とは明記してはいないが、北壁はその全面に、南壁は底から 18 cm 位までに掘削痕が認められているとの観察がある。

こうした鉄製工具痕の有無の観察は中世陥し穴の抽出作業において、有効な手がかりのひとつになるだろう。

### D. 底面

坑底の形状については、四隅を直角に掘削した細長い長方形を呈する事例が大半であり、中世陥し穴の特徴のひとつにあげられよう。非常に坑底が狭く、長方形というよりも「溝状」との表現がふさわしい事例もあるが、このように坑底を狭くすることが中世陥し穴の特徴であると言えよう。

また底面はほぼ平らである事例が主体であるが、南平遺跡、前尾根遺跡、丘の公園第 5 遺跡、芝原尾根遺跡でみられるような傾斜する事例や、南平遺跡小竪穴 351 のように段をもつ事例も認められている。このように底面が傾斜するものが存在することも中世陥し穴に特徴的なものと考えられる。

### E. 坑底ピット

4～10 基が認められており、このうち 5～6 基である事例が大半を占めている。また關盧沢遺跡小竪穴 3 では重複関係がみられており、少なくとも 2 回にわたり使用されていたことが理解されている。

### F. 逆茂木の埋設方法

断ち割りを実施した事例ではすべて「打ち込み型」である。ただしここで注意しなければならないのは、単に打ち込んでいるのであれば、縄文時代の陥し穴でもみられる事象だということである（註7）。中世陥し穴の「打ち込み型」は前述してきたように、先端を角錐状に極めて鋭く尖らせた逆茂木を打ち込んだ痕跡が確認できるものなのである。この差異を識別するにはやはり断ち割りを実施することが必要であろう。またそうした視点からすれば、芝原尾根遺跡小竪穴 389 で発見された逆茂木先端部の存在は重要である。中世陥し穴の逆茂木の実物であり、その形態等を知るうえで非常に貴重な資料である。

## 7. 形態の特徴から中世陥し穴と判断できる事例

前節で抽出した中世陥し穴の特徴を備えたものを以下、紹介していきたい。

### (1) 清水遺跡

長野県諏訪郡原村弘沢に所在する。平成8年度に調査され、縄文時代の竪穴住居跡 34 軒・小竪穴 124 基、平安時代の竪穴住居跡 18 軒・小竪穴 24 基が検出された（註8）。南平遺跡の前年度に調査されているため、報告書では7基の陥し穴はすべて縄文時代のものとして記載されているが、これらは規模・形態から中世陥し穴と判断できるものである。報告者もこれら7基のうち6基の覆土最上層には平安時代住居跡の覆土に酷似する漆黒色土が確認されたことなどから「今回は縄文時代として扱ったが下限は設定できず、それ以外の時期も考慮に入れた方が良くもしいない。」と指摘している。

#### 事例 31 清水遺跡小竪穴3(図6)

平面プランは 357×97 cm、深さは 162 cmをはかる。底面はやや傾斜しており、形状は長方形となる。坑底ピットは6基を数え、その深さ 12~25 cmである。

#### 事例 32 清水遺跡小竪穴 22(図6)

平面プランは 413×168 cm、深さは 163 cmをはかる。底面はほぼ平らである。坑底ピットは8基を数え、14~33 cmの深さをはかる。そのありかたから打ち直しがあつたと考えられ、再利用されている。縄文時代中期後葉曾利Ⅲ式期の第10号住居跡を切っている。

#### 事例 33・34 清水遺跡小竪穴 83・118(図6)

小竪穴 83の方が新しい。小竪穴 83(事例33)の平面プランは 292×120 cm、深さは 114 cmをはかり、坑底ピットは5基を数える。小竪穴 118(事例34)の平面プランは 210×53 cm、深さは 116 cmをはかり、ピットは5基を数える。

#### 事例 35 清水遺跡小竪穴 84(図6)

平面プランは 390×119 cm、深さは 189 cmをはかる。ピットは5基を数える。

#### 事例 36 清水遺跡小竪穴 85(図6)

平面プランは 353×176 cm、深さは 163 cmをはかる。ピットは6基を数える。

#### 事例 37 清水遺跡小竪穴 129(図6)

平面プランは 393×146 cm、深さは 111 cmをはかる。ピットは5基を数え、深さは約 20 cmであり、坑底は長方形を呈する。

### (2) 机原三本松遺跡

長野県諏訪郡富士見町落合机に所在する。平成7・8年度に調査され、縄文時代早期の住居跡1軒、前期前葉の住居跡18軒、前期末葉の住居跡16軒、中期初頭の住居跡3軒、平安時代の住居跡10軒などが検出されている（註9）。陥し穴は25基がみついているが、このうちの1基が中世陥し穴と考えられる。

### 事例 38 机原三本松遺跡 31 号陥し穴(図 6)

平面形は 274×120cm、深さ約 120cm をはかる。坑底はほぼ平らで、坑底ピットは 5 基を数える。

#### (3)中尾遺跡北地区

長野県諏訪郡富士見町落合に所在する。平成 6・8・9 年度に調査され、縄文時代の住居跡 30 軒（早期 2・前期前葉 7・前期末葉 4・前期末葉～中期初頭 4・中期前葉 9・中期後葉 1・晩期 3）、平安時代の住居跡 20 軒、集石 161 基、小竪穴 190 基などが検出されている（註 10）。小竪穴 190 基のうち陥し穴は 33 基を数える。このうちの 4 基が中世陥し穴として考えられる。

### 事例 39 中尾遺跡北地区 9-11 号陥し穴(図 6)

平面プランは 370×95cm、深さは 120cm 程度をはかる。

坑底ピットは 8 基を数える。

### 事例 40 中尾遺跡北地区 9-12 号陥し穴(図 6)

平面プランは 275×90cm、深さは 100 cm 程度をはかる。坑底ピットは 8 基を数える。

### 事例 41 中尾遺跡北地区 9-15 号陥し穴(図 6)

平面プランは 380×120cm、深さは 150cm 程度をはかる。断ち割りは実施していないが、小松氏によると 9-15 号陥し穴では逆茂木を打ち込んでいたことを想起される観察がなされているという。坑底ピットは 6 基を数える。

### 事例 42 中尾遺跡北地区 9-19 号陥し穴(図 6)

平面プランは 245×70cm、深さは 80cm 程度をはかる。縄文時代前期後葉の住居跡と重複するが、本跡の方が新しく、小松隆史氏のご教示によれば、その埋土は平安時代住居跡の埋土と同じような黒色土であったという。坑底ピットは 6 基を数える。

#### (4)鹿尾根遺跡

長野県茅野市泉野に所在する。平成 9 年度に調査され、縄文時代中期～後期の住居跡 2 軒、陥し穴 4 基を含む土坑 48 基が検出された（註 11）。このうち 1 基が中世陥し穴と考えられる。

### 事例 43 鹿尾根遺跡 3 号土坑(図 6)

平面プランは 233×95cm、深さは 120cm をはかる。坑底はほぼ平らであり、212×21cm と短軸が非常に狭くなっており、断面は V 字状をなしている。坑底ピットは 5 基を数え、先端はかなり尖ったものとなっている。

## 8. 中世陥し穴の分布

今回中世陥し穴としてとりあげたのは 11 遺跡 43 事例を数える（註 12）。河西克造氏は馬捨場遺跡の報告書において周辺地域における中世陥し穴の抽出と集成を行い、未報告遺跡も含めて、茅野市および原村において、茅野市馬捨場遺跡・鹿尾根遺跡、原村南平遺跡・恩膳西遺跡・上居沢尾根遺跡・前尾根遺跡・清水遺跡・芝原尾根遺跡の 7 つの遺跡から中世陥し穴が認められていることを指摘した。重複遺跡を除くと管見の限りでは 13 遺跡で中世陥し穴が認められていることになる。

これらの分布をみると、諏訪郡茅野市・原村・富士見町の八ヶ岳西南麓および山梨県丘の公園第 5 遺跡の八ヶ岳南東麓に限られている。広く八ヶ岳南麓地域に分布するといえるだろう。

ところで私は南平遺跡の所在する原村が中世には諏訪神社の「神野」にあたっていたことから、こうした中世陥し穴と諏訪神社の関連性があるのではないかと同遺跡の調査段階から漠然とは感じていたが、河西氏はこの点について鋭く追及した。

諏訪神社では五月会や御射山祭などの祭礼では、それに先立ち、生贄としての鹿猟（御狩）が行なわ

れており、「神野（御狩野）」はその狩猟域であった。一方、八ヶ岳南麓の裾野に中世陥し穴は分布していることとなるが、河西氏はこうした分布と諏訪神社との関係を指摘する。河西氏によれば「神野（御狩野）」は延文元年（1356年）に諏訪円忠が著した『諏方大明神画詞』に初めて登場する言葉であり、こうした中世陥し穴の分布は『諏訪郡諸村並旧蹟年代記』の記述する範囲とほぼ一致することを論じた。今回新たにとりあげた遺跡を加えると若干の齟齬は生じるものの、おおむね中世陥し穴と「神野」とが密接な関係をもつことは理解できるのであろう。

今後は文献史料を含めて、深く考察を進めていくべき重要な観点である。

## 9 狩猟対象動物はなにか。

中世陥し穴の特徴のひとつには長楕円形で長軸方向に比べて短軸方向が極めて狭いこと、また坑底は細長い長方形を呈していることを前述したが、こうした狭隘化した構造はシカの捕捉に最も有意義なものであるとの指摘もあり、シカを狩猟するためのものである可能性が高い（註13）。

また前節で触れた『諏方大明神画詞』には「諏訪野」という場所には鹿穴があったと古老が伝えていた記述がみられることから、河西氏は陥し穴の規模・形状と狩猟動物との関係は現段階では不明な点が多いと留保しながらも、中世陥し穴は諏訪神社の祭礼に伴い鹿を狩猟した施設である可能性が高いことが指摘している。

このような指摘を踏まえるならば、現段階では中世陥し穴はシカを対象としたものであると考えるのが妥当ではなかろうか。

## 10 おわりに

以上、中世陥し穴の事例紹介と若干の考察を行ってきた。前述したように、陥し穴の時期決定はその判断材料が乏しいため容易ではない。そこで今回は、放射性炭素年代測定および鉄製工具痕および断ち割りによる坑底ピットのありかたにより年代同定が可能な事例を集成し、そこから規模・形態の特徴を抽出していく方法をとった。しかしながら今回とりあげた以外にも、中世陥し穴として認識してよいか判断に悩む事例がみられることも事実である。

今後は形態・立地・配列・分布等も含めた多方面な考察をおこない、さらなる事例収集を続け、中世陥し穴の研究を進めていきたいと考えている。

### 註

- 1 桜井秀雄 1998 「南平遺跡にみられる二種の陥し穴」『南平遺跡発掘調査概報』原村教育委員会  
桜井秀雄 2000 「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』52巻10号
- 2 平出一治他 1998 『家下・關盧沢遺跡（第2次発掘調査）』原村教育委員会
- 3 保坂康夫他 1990 『丘の公園第5遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会
- 4 澤谷昌英他 1997 『芝原尾根遺跡』原村教育委員会。なお小堅穴 346・389については計測表と図版とでは数値にかなりの齟齬がみられたため、本稿では報告書図版から筆者が計測した数値を掲載した。
- 5 河西克造 2002 『馬捨場遺跡』長野県埋蔵文化財センター、以下河西氏の引用はすべてこれによる。
- 6 平出一治 2004 『前尾根遺跡（第6次発掘調査）』原村教育委員会
- 7 たとえば長野県茅野市笹原上第2遺跡 26号陥し穴などの事例がみられる（長野県埋蔵文化財センター2005『笹原上第1・第2遺跡』）。また、こうした縄文時代陥し穴の事例がある以上、「打ち込み型」という用語はふさわしくないのかもしれない。今後の検討課題としたいが、当面は南平遺跡に代表される特徴を備えた

「南平式打ち込み型」と仮称しておくことにする。

- 8 澤谷昌英他 1997『清水遺跡』原村教育委員会
- 9 樋口誠司 1998『机原三本松遺跡』富士見町教育委員会
- 10 未報告遺跡であるが、今回金大考古学研究室の後輩でもある井戸尻考古館の小松隆史氏のご好意により本遺跡と机原三本松遺跡について、ご教示ならびに資料提供をいただき、事例として紹介させてもらうことができた。日頃からの学恩とともに小松氏に深く感謝する次第である。なお遺構トレースおよび計測数値については筆者によるものであり、その文責は筆者にある。
- 11 小林深志・小林健治 1998『鹿尾根遺跡・鹿垣遺跡』茅野市教育委員会
- 12 この他、長野県茅野市北山に所在する長峯遺跡 SK201 も中世陥し穴の可能性がある。
- 13 守矢昌文「八ヶ岳西南麓・霧ヶ峰南麓における縄文時代の落とし穴について」2006『考古論文集』茅野市尖石縄文考古館。なお、これらの文献等のご教示には、長野県埋蔵文化財センター河西克造氏・柳澤亮氏・廣田和穂氏のご尽力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

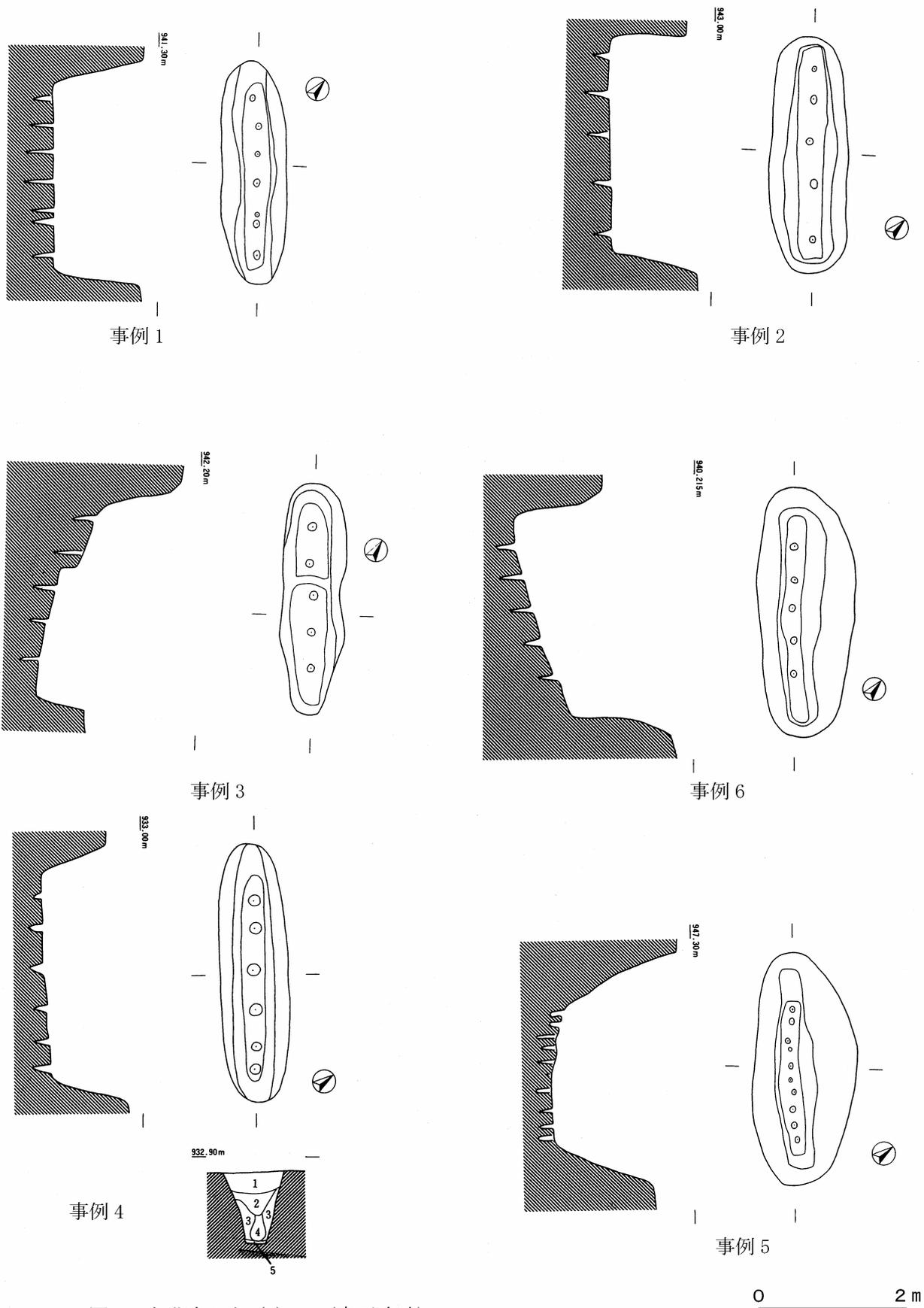
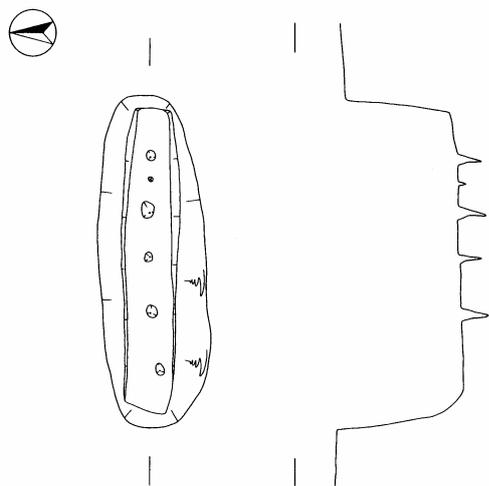
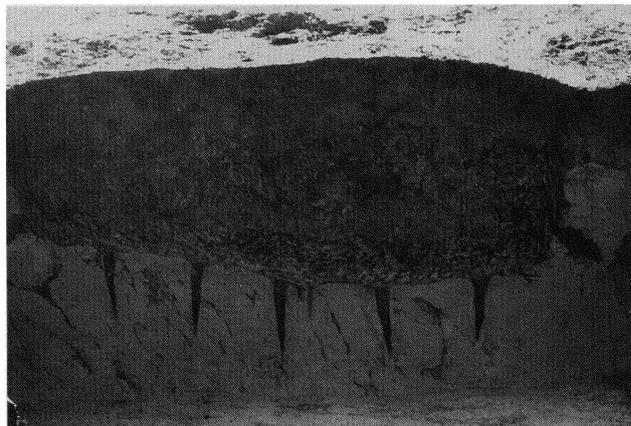


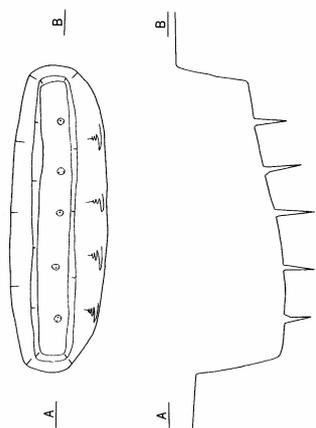
図1 中世陥し穴 (1) (南平遺跡)



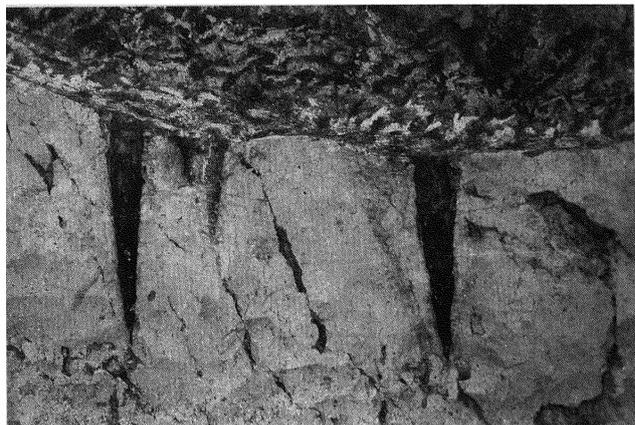
事例7



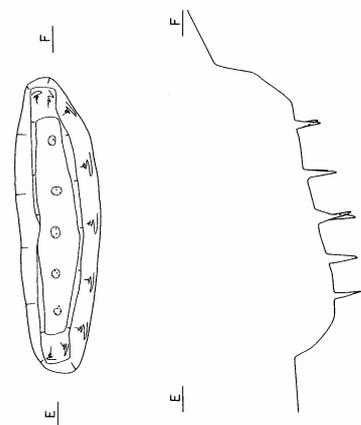
事例8 カッティング状況



事例8



事例8 カッティング状況 (アップ)



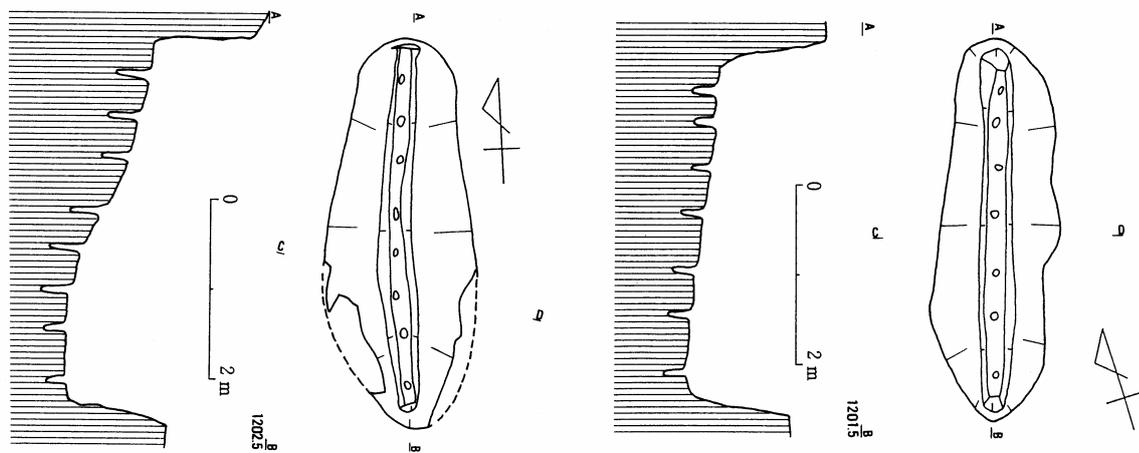
事例9



事例9 カッティング状況

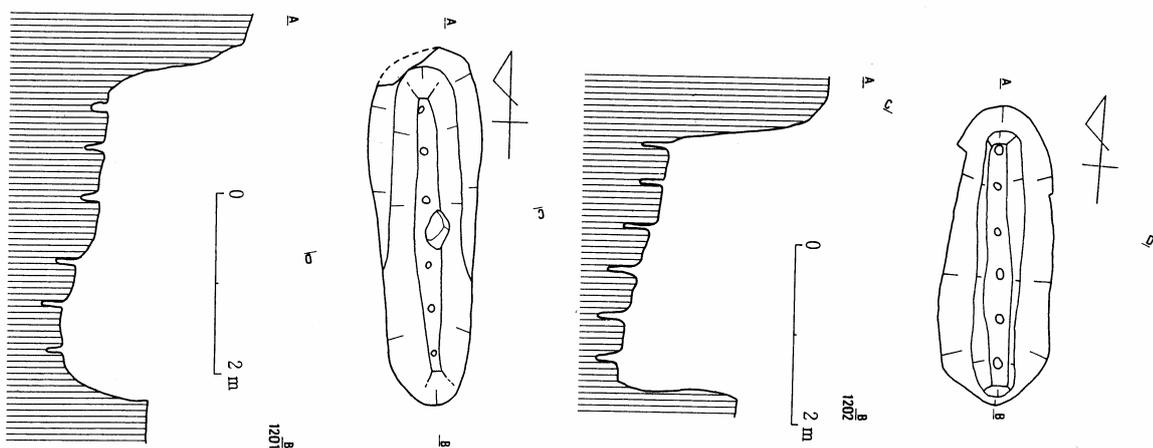
図2 中世陥し穴 (2) (關盧沢遺跡)

0 2 m



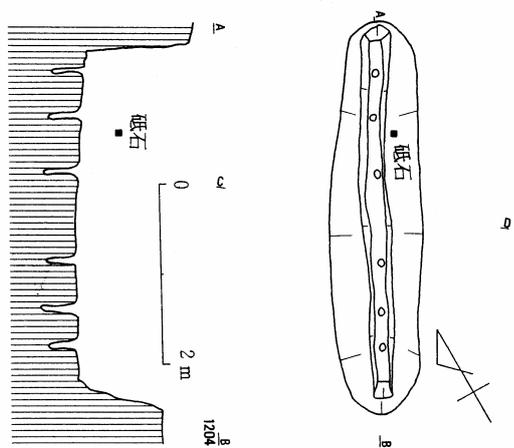
事例 10

事例 11

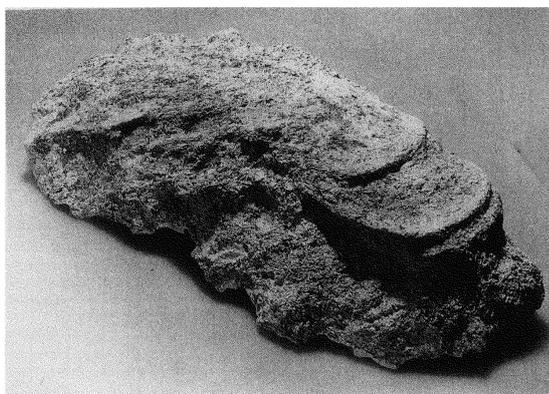


事例 12

事例 13



事例 14



事例 13：掘削工具痕のモデリング陽像

図3 中世陥し穴 (3) (丘の公園第5遺跡)

0 2m

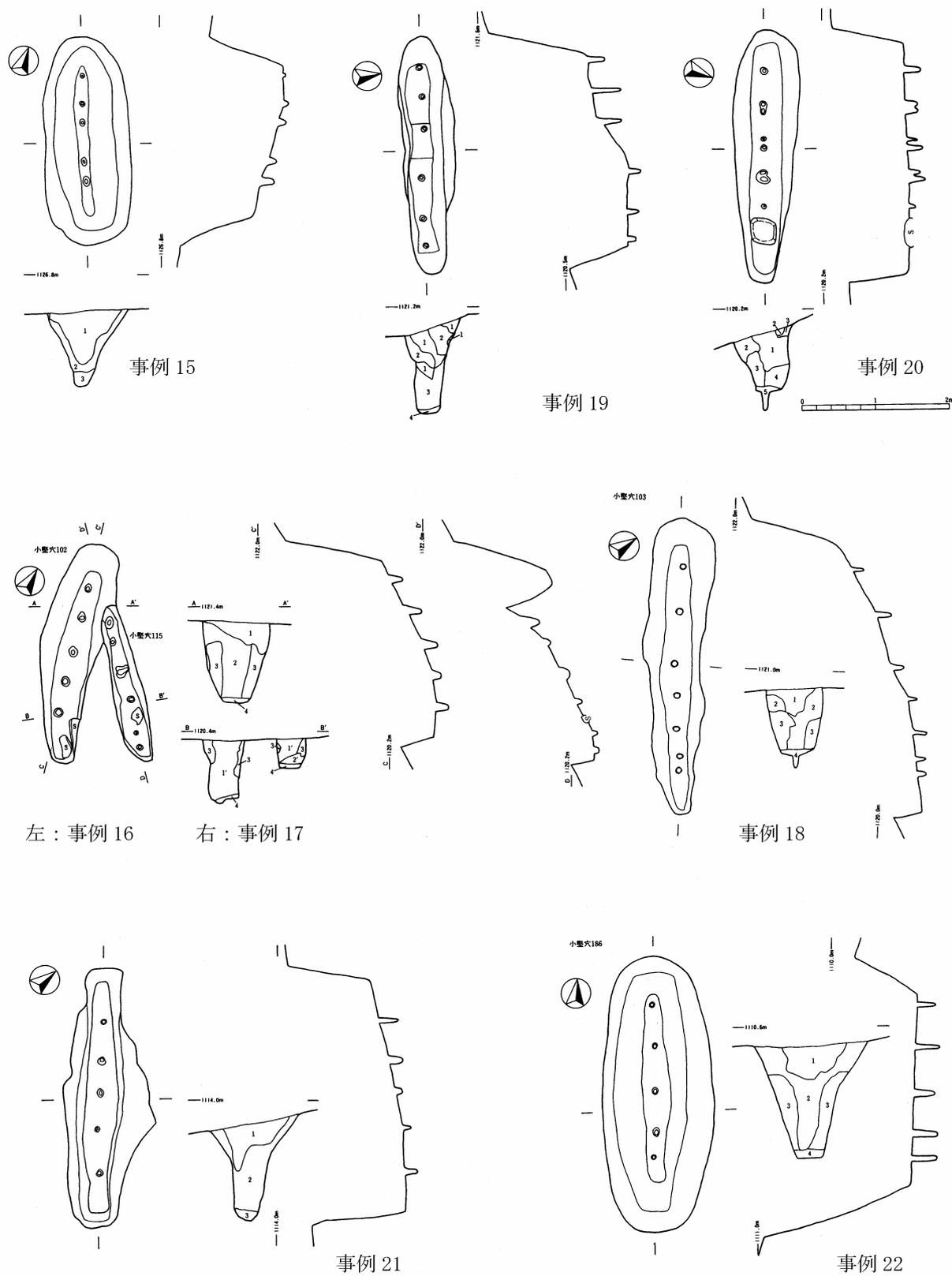
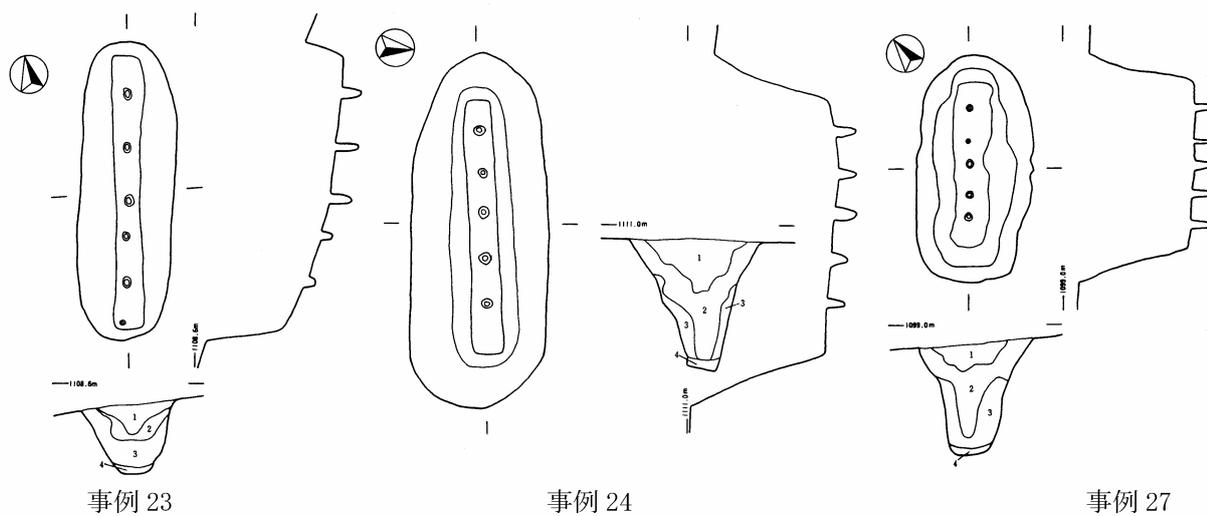


図4 中世陥し穴 (4) (芝原尾根遺跡)

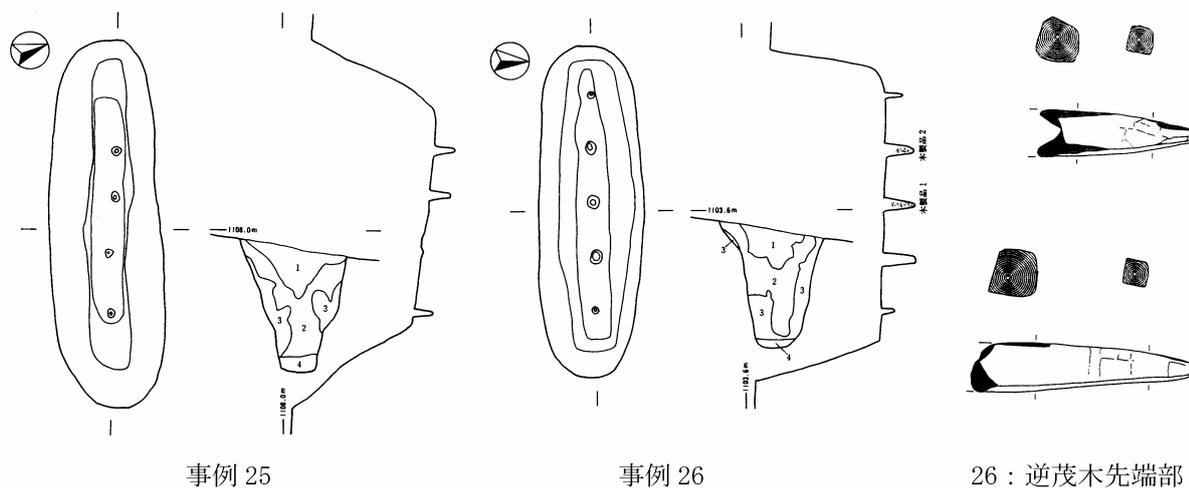
0 2 m



事例 23

事例 24

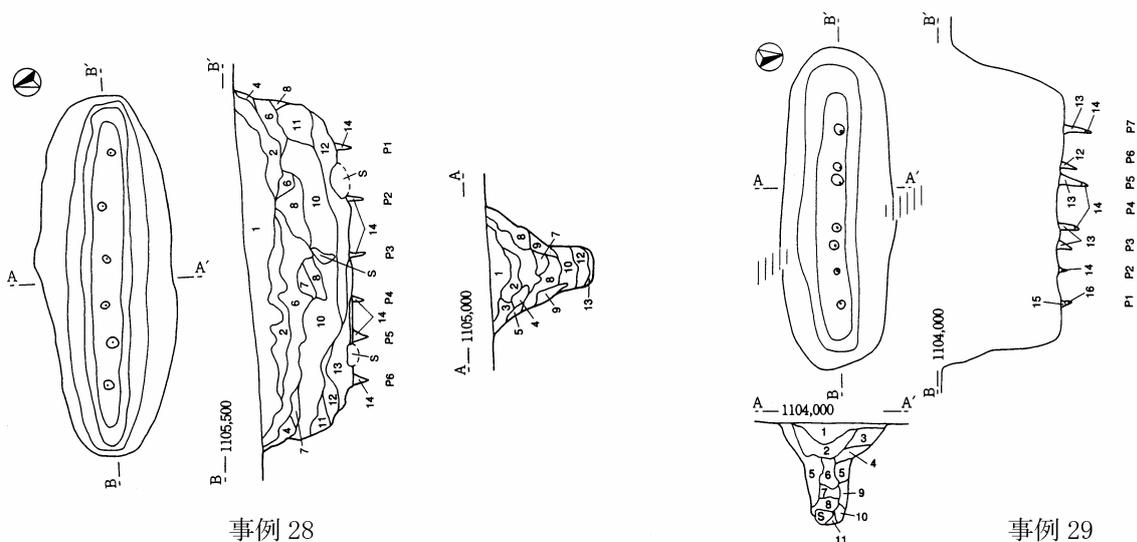
事例 27



事例 25

事例 26

26: 逆茂木先端部



事例 28

事例 29

図 5 中世陥し穴 (5) (芝原尾根遺跡・馬捨場遺跡)

0 2 m

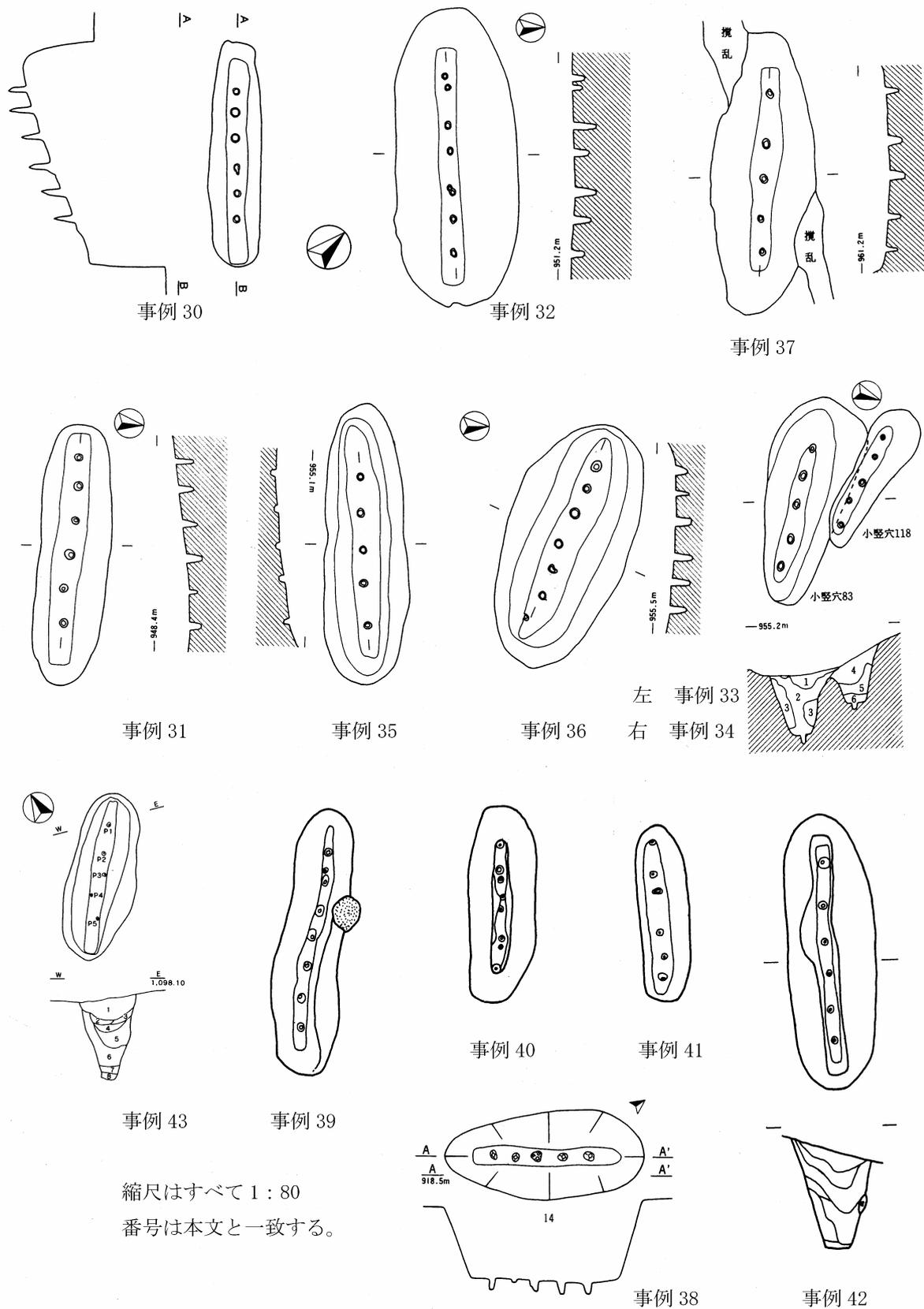


図 6 中世陥し穴 (6) (清水遺跡・前尾根遺跡ほか)